

放射線看護のみらいに向けて Towards the future of radiological nursing

野戸 結花

Yuka NOTO

弘前大学大学院保健学研究科

Graduate School of Health Sciences, Hirosaki University

日本放射線看護学会は2012年に任意団体として発足し、その年の9月に弘前の地で第1回学術集会を開催しました。この時の大会長は、当時弘前大学に所属しておられました西沢義子教授が務められ、私は事務局長を拝命し、本学の看護学領域教員総出で、手探り・手造りで学術集会の企画・運営に携わったことが懐かしく思い出されます。その後、2013年には日本放射線看護学会誌の第1巻が創刊されました。初期の頃は年1回であった発刊が、2020年からは年2回となり、着実に学術基盤が築かれていることを実感しております。

このたび、過去の学術集会会長の経験者として、巻頭言執筆の名誉を頂戴しました。第10回学術集会という記念すべき回に、弘前を指名してくださった理事会の皆さま方に深謝申し上げます。早いもので、開催から2年半が経過しましたが、当時のさまざまな右往左往は昨日のことに思い出されます。この頃はまだ、新型コロナウイルスの感染予防対策が厳重にとられておりましたので、全国の感染状況に鑑み、その年の1月にはやむを得ず、対面からWeb開催へと切り替えました。幸いにして、開催側も参加者の皆さま方も、こういったWebでの開催には慣れた頃でしたので、大きなトラブルもなく盛会裏に終えることができました。ただ、学術集会特有の熱量を直接肌で感じることができず、また、大会長としてのピリピリする緊張感を経験できなかったことが幾分心残りではあります。

この間、本学会の歴史に深く刻まれるできごとがありました。学会員の皆さま方もご存知のことと思いますが、放射線看護専門看護師が誕生しました。初年度となる2022年度には全国で3名が、2年目の2023年度も3名が認定試験に合格し、現在6名が「認定バッジ」を胸に活動を始めたところです。専門看護師分野としての「放射線看護」が日本看護系大学協議会や日本看護協会から承認される以前より教育を行ってきた大学院の一角として、責任を果たすことができた安堵と同時に、これからの放射線看護を牽引する人材を継続的に輩出していく責務を新たにしたところです。また、日本看護協会のホームページには、放射線看護分野の特徴として「放射線がもたらす身体、心理社会的影響の特性をふまえ、放射線事故・災害における平時からの体制構築と健康課題を有する対象へ長期的な看護を提供する。また、放射線診療を受ける対象者とその家族へ水準の高い看護を提供するとともに、職業被ばく低減の方策、施設における体制を構築する。」という文言が掲載されています。放射線や被ばくの影響、防護などに関する専門性が高い知識と技術を基盤とし、「放射線事故・災害時の被ばく医療看護」と、いわゆる臨床現場での「放射線診療を受ける対象者への看護」を両輪とした「放

放射線看護」の定義に依拠し、その専門性の可視化や高度看護実践、学術基盤のさらなる構築に挑戦していくことが次の課題であり、使命であると考えています。一方、これらの壮大なたくらみは、決して数名の放射線看護専門看護師や看護研究者で成し遂げられるものではないことは自明の理です。先達である放射線看護の高い専門性を有するがん放射線療法看護認定看護師やインターベンションエキスパートナース、核医学診療看護師、被ばく医療看護を専門に学んだ方々をはじめ、臨床現場で日々、対象者と向き合い、丁寧な看護を展開されている看護師の皆さま方と手を携えて、成し遂げていく必要があるものと思っております。そのためにも、本学会では関連する研修会・セミナー、研究事業等の案内や情報発信に力を入れていきたいと思っております。また、年一回の学術集会において看護実践や研究結果を発表し、情報交換や学術的な交流をより深めていくことができると祈念しております。そして、研究成果の公表の場として本学会学術誌を選んで頂けると大変ありがたいです。「千里の行も足下より始まる」です。学会員一人ひとりの足元の一步の積み重ねが、みらいの放射線看護学の礎になることを願って止みません。